

## お慈悲

「お慈悲」 「お慈悲」

目を閉じて口の内で二三度言ってみる。

「慈悲の涙に結ばれて、大地の上にすすり泣く、同胞ここに集りて、生れしその名光明団。」

「旦那様奥様、お慈悲にお恵み下さいませ。」

「慈悲の国 「親の慈悲」

慈悲、お慈悲。口の内でくり返してじつと深いどん底からの私の魂の声を聞く。そうしてペンを握る。

愛せんとする親の悲痛に涙流れる

町を通る自動車のラッパの響。何かの広告の楽隊の美しいクラリネットの調律。馬車のガタガタ通る音、肴屋の声。「大阪天王寺セメンの蒸し菓子」とどなって歩く何時ものお爺さんの声。

ペンを待った私の手は冷たく震えて、思いは胸の内にたぎって、それらの騒々しさから、知らぬ内に深い自分の主観に没入する。

「お慈悲」 「お慈悲」

何時とはなし涙がにじむ。

「お慈悲で育ったのだ。お慈悲で生きたのだ。」

思いは何時しか先日見た西川芳溪氏作「震災哀話十八年後」という劇のその舞台画に移る。

私はその芝居を見た時、二度も三度も泣いた。芝居を通して念しかし、称名した。塚本涙子は、横浜震災の当時、自分の主人ジョージストーン氏の娘メリー嬢を救ったために、自分の娘雪子を見失ってしまった。塚本涙子は、火の中に失せし雪子を探ね探ねて十八年、その間とうとう狂女になってしまふ。にぎ津公園の社頭、通り行く他人の子を見ては、愛児雪子の幻を見る。情の人に子供の持ち物を気安めに与えられずは、それを背に負って、悲しき子守歌を歌って哀れにさすらい歩く。

その一步一步が、その一声一声が腸ににじむ。子故に気の狂う親。子守歌の余韻悲しく消ゆるところ、愛せんとする者の悲痛に涙流る。

町の雑音の中に

母の子を思う心、父の子を養う心、その心に慈悲という名のつく限り、人間の言葉の内に「お慈悲」という言葉のある限り、人の子は涙の世界を所有する。

町のあの騒々しい音、それは一見した時、物欲をおう戦の剣の音でもあろう。けれども、もつと深い何物かをあの騒音の内に求める。

「夜なきうごん」のチリンチリンと哀れになる鈴の音。

寒い寒い夜の街の辻に立つて、まれに立止まる人を相手にする年老いた男の気の毒さ。けれども町裏にその車が帰った時、そこには、いとしい愛児が「お父さん」と言つてとびつく。

おお、お慈悲、何とも言わずにその男が愛児を抱いてその顔をのぞきこむ時、愛児は安らかに親のお慈悲に温く眠る。

町のあの戦いの騒音を綴り綴る一貫の流れ、それは、口に出さざる慈悲の響ではあるまいか。

子を失つて何処に親の光があるう

話はもとの「震災哀話十八年後」にもどる。ジョージストーン氏は夫人とメリー嬢をつれて日本に来る。そして我が子メリーを救つてくれた恩人塚本涙子及びその遺族を求める広告を新聞に出す。

ここにペンキ屋を業とする正直一徹な吉野万次郎という男がいる。震災当時横浜にあつて、逃げる火の手の中、荷物を棄てて涙子の娘雪子を拾つて我が子のように可愛がつて育てる。雪子の今の名はお波。

お波が通う裁縫女塾に仕事に行つたペンキ屋の吉野、新聞広告の話をきいて、我が養女お波のことに思い至り、ストーン氏が十萬円の金をその遺族に与えることを聞いて娘の出世を思い、夫婦諸共お波をつれて、ストーン氏の尋問の座に出る。詐偽師小澤という男の言分は立たない。吉野の言うことが正しいのでお波は急にストーン氏一家から命の恩人として大切がられる。

求められるままに、当時お波が着ていた洋服をとりにかへつた青野ペンキ屋夫婦は、急に娘お波が我が手からつれて行かれはせぬかと心配する。

「十萬円のお金よりも、娘の出世よりも、今迄どおり、親子三人の日暮しがいい。もし娘がいなくなつたら老後に何の光があるう。」と、夫婦は急に態度がかわる。

「白金も黄金も玉も何せんにまされる宝、子にしかめやも」

人がもし親と名づけられる身の上になつた時、子にまさる宝が何処にあるう。

ペンキ屋が、子供のあの震災当時着ていた着物は、家移りの時売つたと見える、という言葉の内に、たとえ十萬円は失つても娘お波を失いたくないという親の情が読まれる。ストーン氏がお波をつれて米国に帰ることをペンキ屋のためにやめ、お波とお金を両方とも渡した時、吉野夫婦は地上にわつと衝突してしまう。

嬰兒の本願は即ち母の本願

女の足で疲れた体を急がせながら、隣村から我が家に急ぐ一婦人。

日暮れ近い森の内、河の堤、気にかかるはたつた一人寝かせておいて出て行つた可愛い自分の子供である。

「若くして夫に別れ、夫の死後生れ出でた愛らしい嬰兒、夫の形見、私の宝、いい子してねていてくれるのだろうか。」

道に伏していた眼をあげて家路を見れば、

黒煙！ 猛火！

彼女は走った。

「女は弱し、母は強し。」

猛火の内に包まれた子供の魂の本願、たった二歳の嬰兒の口に言わざる、心に意識せざる魂の本願、

火に焼かれる恐怖、

火をのがれて、生きねばならぬ幼児の本願、それはすぐ、真一文字に走る母の本願となる。「女は弱し、母は強し。」

幼児の本願を提げて生れ出る母の慈悲心、その慈悲心は、弱い女を金剛力の持ち主にする。

彼女は猛火の内に飛びこんで、我が子の室に走る。

火の粉、真紅の炎、焦熱の炎。

愛児を抱いて狂う彼女の頭髮は火に燃える。

血路、獅子奮迅の本願力の前に猛火とて何の妨げぞ！

懐に幼児抱いた彼女は倒れた。

七歳にして孝に目覚めた丁蘭

たった七才になつた腕白盛りの丁蘭、何時もとちがつて、力なげに家に帰る。「お母様には何故に頭の髪がないのだろう。よそのおばさんには皆黒髪があるのに、くやし。悲しい。今日は皆で一緒に、つるつる頭のおかあさんと嘲笑れた。」

「御母様。お母校にはなぜ頭髪がないのです。よそのおばさんには皆黒い髪があるのに、なぜお母様ばかり、頭がツルツルはげているのです。」

母の日からは涙が流れる。

「これ丁蘭

思い出だせば五年前

お前がたった二才の時

お母さんは唯一人

お前残して隣の村へ

用事に出掛けて帰るさに

見れば我が家は火に包まれて

今にも焼けて、独り子の

お前を失ふ、危機一髪

狂ふ火の手に別け入りて

汝を抱き走り出れば

炎は我が身に燃えついて

こんな姿になりました。」

唸。尊厳なる哉。人の生命。

唸。崇高なる哉。親の慈悲。

たった七才の丁蘭は、そのまま泣いた。まことに丁蘭が生きているというその事實は、そのまま母の頭の禿げているということであった。

支部歴代の孝子二十四人、大舜。漢文帝曹子、閔損、仲由、孟宗……などい  
わゆる二十四孝の一人に、丁蘭が加つて名を残し得た所以は、こうした美しい母の犠  
牲が生み出したのではないか。

慈悲、お慈悲、親の心に、慈悲と名がつくか。

何という生きる者の尊厳だろう。光榮だろう。

慈悲こそ、私の育つ根本の力であった。

失はれた子を迫ふ親

失せた我が子を訪ね探して十八年、気の狂った塚本涙子が、ペンキ屋吉野や、ス  
トーン氏その他によつて実子、雪子（今のお波）を知った時、狂った心は元にもどつ  
た。成長して立派になつたのを見た時に、地上に伏して泣き入つてしまふ。

失われた子を再び求め得た親の心、涙なくして見られようぞ。

失われた子を追うて狂う親心。

その親心に育つたのだ。逃げたい、逃げたい、恩を知らない人の子故に、親は泣き  
つつ後を追うのだ。

慈悲で育つ

「仏心とは大慈悲是れなり。」

「如来苦を受くれども苦をおぼえず、衆の苦を受くるを見ては己の苦の如し。衆生  
のため地獄に処するも苦の想い及び悔ゆる心を生ぜず。一切衆生各々異りたる苦を4  
受くれば悉く是れ如来一人の苦なり。」（涅槃經）

十方衆生は皆、仏の子であります。

十方衆生の涙の内に湧き出したお慈悲であります。十方衆生の涙、それはすぐその  
ままお阿弥陀様の御涙であります。

十方衆生は皆、魂の本願を忘れて、本願に生き得ないで、空しく生死海に流転しま  
す。

私の本願をそのままとつて自分の本願とし、その本願を成就するために、どんな苦  
患の中でも立ちきつて下さるのは法蔵であります。

大慈悲は今日ここまで私たちを育てて来ました。善導大師のいわゆる「無人空曠の  
沢」に気づいてたつた一人の淋しい永遠の旅に泣いた時、そこに見出だされたものは  
久遠の親の慈悲でありました。

「大悲倦きことなくして常に我身をてらすなり。」

赤子はだんだん太つてゆきます。それは決して厳しい法律の条文でもなければ  
倫理道德の法則でもありません。豊かな物質によつてもありません。ただ理論  
ぬきの慈悲の懷に抱かれることによつてであります。

私達の生命も、ただ如来の大慈大悲によつて真実に生かされて行きます。赤子は親  
の慈悲があるのないと暇な議論で太るのではない。ただ母親の慈悲によつてのみ  
過去、現在、未来は美しく創造されてゆきます。親の愛について彼是と議論する頃は

もう育てあげられた後であつて、議論して承知した時、親の慈悲は生れたのではありません。

今更親の慈悲に感激して泣いても、それによつて親の慈悲が出来ても来ませぬ。私の現実そのままが、親の慈悲のおんはからいであります。

「信ずるとは」素直に受入れることでもあります。「疑うとは」慈悲を拒みしりぞけることでもあります。あるとかないとか議論することでもあります。信じない子のために親は泣きつつ働きかけます。親はもとより子を離れてはいないが、子は疑うことによつて親をはなれています。そこに親の涙があります。

親を信ずることによつて親の人は充たされます。けれども何もないところに子の信頼の心はおきませぬ。子供の信ずる思いは、子を思う親の心そのものから生れて来ます。信心までが親によつて与え恵まれたのであります。

私の一切は尽十方無碍光如来のお慈悲によつて創造されて来ました。そうして私のお慈悲を信ずることによつて、私は慈悲に奉仕する生活を与えられました。